

新しい作家たちのために

かつて作家の表現は、メチエを作ることから始まりました。色材、支持体といった素材づくりから制作に至る全営為が「作家の表現」でした、しかし、十八世紀末に起こった産業革命は作家の中にあつた表現者と素材製造者とを分離させました。以降、多くの作家はメーカーという他者から素材を求めて制作に打ち込み、メーカーは作家に素材を提供するために知識と最新の技術力を注いで良質の製品を開発していきました。

それは、一世紀を越えて今に続いています。この分業体制は時代や作家たちのニーズをとらえ、高品質な素材とさまざま

な新しい色材を生みだしてきました。アクリラもそのひとつで

す。この色材は生まれてまだ三十数年がたったにすぎませんが、新しい絵具として作家たちに用いられ、多くの優れた作品を世に送りだしています。今回開催するアクリラート展は、そのアクリラを用いて意欲的な表現活動が続けている若い作家たちによる作品展です。弊社は一九八六年からアクリラ奨学制度（ホルベイン・スカラシップ）を設け、将来性のある作家の制作活動を援助するとともに、作家との交流を通じて表現の可能性を広げる新しい色材の開発と品質の向上に努めてきました。アクリラート展は、その成果のひとつであるといえましょう。

今、表現しなければならぬのは作家たちだけではありません。表現者と素材製造者とが分離したことにより、あたかも表現する主体は作家であり素材づくりは表現行為になりえない、と当然のように考えられてきました。しかし、素材と表現行為は不可分のものです。かつての作家たちの営為はそのことを明らかにしています。そして、今の若い作家たちの多くがメチエや支持体にこだわり、真摯に新しい表現の可能性を追求している姿はそれに重なっていきます。作家たちは表現行為と素材との距離が掛け離れてしまっていることにいらだち、表現と素材、自分の中の表現者と素材製造者との融合を必死に図ろうとしています。

素材の表現者になる。

今後、メーカーは作家との交流を今以上に緊密にして、素材の新しい表現の可能性の追求を続けていく責務があります。言葉を変えて言えば、それはメーカーが「素材の表現者」になること——ではないでしょう。それによって表現行為と素材との距離が避けられ、メーカーと作家がともに切磋琢磨してより高次の新しい表現に向かうことができる、と考えます。ホルベイン・スカラシップとアクリラート展が、そのための作家とメーカーが表現の可能性と未知を追求する共同の実験場になれば幸いです。

ホルベイン工業株式会社

転換期にある画家たちのエネルギー

形式を問う作品に出会える
楽しさ。

宇佐美圭司(実行委員)

ホルベイン・スカラシップの第一回奨学者から送られてきた作品写真数点が、それぞれ一枚のボードに貼られ、私たち（野見山晚治・池田龍雄・谷川晃一・宇佐美圭司）の前に並べられた。その中から展覧会のために二十人を選考しなければならぬ。

千人余りのスカラシップ応募者から百人の奨学者が選ばれ、そこから二十人ということになれば五十倍をこす倍率ということになる。選考にあたった四人の画家はそれぞれ作風も違い、考え方も違っているけれども、応募者よりも何十年か先輩として作家活動の修羅場をふみ越えてきており、また違いはあっても皆それぞれ表現者としての主張を持っていることにおいて共通している。そんな信頼感が無言のうちに働いたからであろう、選考は二時間ほどでスムーズに終了した。

もちろん正解が出たというのではない。そんなことは不可能なことなのだ。だから私はにはさておき、はじめに選考にもれた人たちに教しをこわなければならぬと思う。カラー写真による選考であるから、写真の大小、その写真の良し悪しによって、作品の感じが大きく左右されてしまう。選考は私たちの能力のつたなさに写真メディアの力が相乗し、かたよった決定に至ったというべきであろう。選考の結果として、多くの才能や努力を切り捨てたことを思わずにはいられない。しかし、それはどのような選考においてもある程度は避けられないリスクであり、今は選ばれた若い画家たちが一つのチャンスを生かして全力投球してくれることを願う以外にない。

この展覧会は五十号とか百号とかの大きさを指定し、実際の作品を公募して審査されたものではなく、奨学者の日常活動（個展など）の写真によって選ばれたものである。だから展覧会は写真選考という欠点はあろうが、その反面規格サイズとは無縁でありむしろ表現の形式を問う、といった作品に出会える楽しみがある。実際、半数近くの選ばれた人たちが、既成の絵画の形式からはみ出す場で表現活動を展開しており、それが十全とはいわぬまでも展覧会場に反映されているのではあるまいか。

形式を問うことがすぐれた表現を生むとはかぎらないが、形式を問うというエネルギー

を喪失しては転換期にある今日の現代美術は成立しない。形式を問うことが避けがたいのは、美術よりもより総合的な命題である、生そのものがその存立形式を問われているからであろう。絵画の形式といっても、その作品が売れるというようなシチュエーションからほど遠くにいる一人の若い画家の表現現場では、それは表現の支持体を問うという意識に変化する場合が多い。五十号、百号といった文字通りの形式的な枠組みから離れ、画家たちは太古のアルタミラの洞窟やサハラのはれた岩板へと夢を馳せる。もちろん、何に描いてはいけないというような制約はない。そして、それはどのように展示しなければならぬという約束もありはしない。表現に可能性を与えると考えられるなら、あらゆる試みが企てられてしかるべきなのだ。

伝統が顧みられる理由の一つは、過去の遺産こそが私たちにじかにふれることの出来る異なる形式を暗示するからであろう。支持体について考えはじめる作家の多くは、表現の未来を志向しながら「人間の伝統」と呼びえるものに行きつくのである。それが転換期の重要なエネルギーとなりえるのは、表現の最初の一步を踏み出す生々しさが、支持体を選ぶ行為によって回復されるからであろう。

表現の可能性はしかし、形式を問う試みの中にだけあるのではなく、もちろんない。当然なことに、そしてやっかいなことに、あらゆる脱既成の支持体の試みは、任意の一つの支持体の上に写像しなおすことが可能であろう。五十号、百号といったキャンパスの枠組みが、あらゆる表現の支持体と対等である循環が避けがたく私たちを訪れるのである。

この展覧会は今日の現代美術のそのような状況の一つの側面を現わすことになるであろう。二十人の作家には各自六、七mの壁面とその付近が展示スペースとして与えられたという。めんどろな取り扱いや展示の労を惜しまなかった、主催者の努力に敬意を表したい。そして第二回、第三回とアクリラ奨学制度とアクリラト展が、益々充実したものになっていくことを願っている。

